

豊かな社会とは

—— 格差社会を考える ——

庄司俊恵

はじめに

今から 50 年以上も前に書かれた、ジョン・ケネス・ガルブレイス*1 の名著からタイトルを借用している。ガルブレイスは新自由主義経済・市場原理に基づいた経済発展が抱える社会問題、格差や貧困をすでに予見し、その処方述べている。彼の卓見した分析を基に、現在のグローバル化社会の弊害をどのように是正していくべきかを論じたい。

1. 資本主義の始まりから現在まで

イギリスで始まった近代経済は 4 人のエコノミストによって研究され、当時の工業化社会（産業革命）への移行にうまく合致して伝播していった。アダム・スミス、トーマス・マルサス、デイビッド・リカード、ジョン・スチュワート・ミルである。彼らの経済理論をさらに擁護したのはチャールズ・ダーウィンが唱えた進化論を社会学に応用したハーバート・スペンサーであった。適者生存という言葉を使ったのはダーウィンではなくスペンサーである。競争は強い者を選び出すばかりでなく、その才能を伸ばしその永続化を保証する。そして弱者を淘汰することによって弱者の再生産されないことを保証する。この考えはアメリカでさらに発展した。

*2

資本主義に対して社会主義、共産主義、全体主義、ケインズ学派など対抗思想が打ち出されていったが、いずれも経済成長を是非とする基本理念は共通である。そこに疑問を呈し、経済成長至上主義が社会にとって本当に不可欠か否かを真摯に訴えたのは制度学派 (institutional economics) である。古典派経済学が主張する市場の見えざる手によって需要と供給のバランスが自動的に起きるとするのは理想であり、現実の人間は感情に走ったり、自己利益へと誘導する傾向があるため、市場の失敗が起きる可能性がある。そのため制度学派は売り手の買い手の監視や制限を設ける政府や団体、委員会などを設ける必要があると主張した。冷戦後、一人勝ちした資本主義はますます世界中を席卷しグローバル化と呼ばれるようになり、世界標準のシステムと認識されるようになった。ソースティン・ヴェブレンらによって創始された制度学派はジョン・ケネス・ガルブレイスが引き継いだ。資本主義が世界の主流となったために大きく取り上げられることはなくなった。しかし 2008 年のリーマンショック以降、資本主義の欠陥や矛盾、自由主義経済の不安定さから再び着目されている。

2. 格差社会の問題

資本主義の理念は個人の自由な経済活動と利益追求で、政府や地域社会から干渉を拒む。競争原理を旨とするため自ずと勝者に資本が偏在していく。パイ（経済成長）を大きくすれば、トリックルダウン効果で貧困層にも富が滴り落ちると主張したが、実際にはガルブレイスの指摘通り、経済成長しても貧困問題は無くならない。個人ではどうにもならない貧困問題に対し、ガルブレイスは政治の介入と具体的対策を述べている。グローバル化によってどの国も格差による不安定な社会に直面している。では、格差社会は何が問題かということ、不平等の拡大に他ならない。これは民主主義の理念に反し、多くの国民の社会権・生存権・生活権を脅かす。国家が国民の安心・安全を守らなければ、人々の間に社会不安・精神的不安を生じさせ、ガルブレイスの説くゆたかな社会は実現しない。人々の望む幸福な社会とは公平な社会つまり格差が少ない社会である。つまり人間の価値は貨幣価値に換算されるのではなく、社会的価値つまり社会的存在として認められることを最も望んでいる。*3

3. 終わりに

これからの社会

行き過ぎた資本主義を見直し、経済成長至上主義から脱却すべて時に来ている。利潤追求で大量生産・大量消費の体制は資源枯渇や環境問題を地球規模で引き起こし、人類の存続如何まで深刻さを増している。それでは我々一般市民はどうすればよいか。

アメリカで始まった‘ウォールストリートを占拠せよ’運動や‘アラブの春’に見られるように市民が立ち上がり、格差のない、真の民主主義社会を目指すように国内外に訴える行動に出ることである。彼らの訴えは普通の暮らし、定職につく、安心して働ける職場の提供という身の丈に合った願いである。今までのような過激な社会改革に走ることなくインターネットで同士の募り穏やかに進められていった。アメリカでは大統領も彼

らの主張を認めたのである。政治に対して諦観していても何の解決にもならない。トップダウンからボトムアップの社会へ、変革を市民の手でやり遂げなければ、真の民主主義社会は達成できない。*4
 民主主義は衆愚政治、ポピュリズムに陥るなど欠点を指摘されるが、人類が平等の大切さ・人間の尊厳の大切さを実現させた偉大なシステムだと言える。この民主主義を経済にも政治にも社会全体にも反映させるには、国民1人1人の協働に掛かっている。グローバル化で切り捨てられた人間関係の大切さ、地域社会とのつながりをもう一度取り戻すことから始めていくことが重要である。

参考文献

*1 ‘ゆたかな社会’ 決定版 Galbraith, J. K. 鈴木哲太郎 訳 2006年 岩波書店
 *2 ‘アングロサクソンは人間を不幸にする’ ビル・トッテン 2000年 PHP文庫
 *3 ‘ポスト大企業の世界：貨幣中心の市場経済から人間中心の社会へ’ ティエト・コーテン
 Korten, D. 西川潤監訳 2000年 シュブリンガー・フェアラー東京
 ‘経済成長がなければ私たちは豊かになれないのか’ ダグラス・スミス 2000年 平凡社
 ‘経済成長神話からの脱却’ クライヴ・ハミルトン Hamilton, C. 嶋田洋一訳 2004年 アスペクト
 ‘大企業が民主主義を滅ぼす’ リナ・ハーツ Hertz, N. 鈴木淑美訳 2003年 早川書房
 ‘世界に格差をバラ撒いたグローバリズムを正す’ ジョセフ・スティグリッツ Stiglitz, J. E.
 楡井洋一訳 2006年 徳間書店
 ‘格差はつくられた’ ポール・クルーグマン Krugman, P. R. 三上義一訳 2008年 早川書房
 ‘経済学は人間を幸せにできるか’ 斎藤貴男 2010年 平凡社
 ‘GDP 追求型成長から幸せ創造へ：グリーン経済とそのあとに来るもの’
 AtKisson, A. & 枝廣 淳子 2012年 ランダムハウス・ジャパン
 ‘The Cost of Inequality’ Lansley, S 2012年 Gibson Square Books
 *4 ‘世界の99%を貧困にする経済’ ジョセフ・スティグリッツ 楡井 浩一 峯村 利哉 訳
 2012年 徳間書店
 ‘99 TO 1:How Wealth Inequality Is Wrecking The World and What We Can do About It’
 Collins, C. 2012年 Berrett-Keohler
 ‘Occupy’ Chomsky, N. 2012年 Penguin